

「立ち上がる農山漁村」選定案概要書

取組分野：【食】

- | | |
|-------------|----------------------------|
| 1. 都道府県、市町村 | 山形県 ^{おばなざわし} 尾花沢市 |
| 2. 事業者名 | 尾花沢市 |
| 3. 取組みの名称 | 尾花沢、きれいで、おいしく、ここちよい |
| 4. 取組概要等 | |

概要

山形県尾花沢市は、全国でも有数の豪雪地帯であると共に、夏スイカとしては日本一の生産量を誇るスイカの名産地である。また、市の中心に位置し大正年間にかんがい用ため池として築堤された徳良湖（とくらこ）は、山形県民謡「花笠音頭」発祥の地である。

しかし、尾花沢市の農業は、農業産出額が平成6年の134億5千万円をピークに減少を続け、農産物需要の低下、価格の低迷が続き、平成16年には93億7千万円にまで低下、また販売農家数は平成2年に2,957戸あったものが、平成17年には2,150戸と、800戸（27%）も減少している。農業就業者に占める65歳以上の割合を見ても、平成2年に24.3%だったものが平成17年には58.0%と大幅に上昇し、急速に高齢化が進んでいる。今後、深刻な担い手不足に陥ることが予想され、耕作放棄地の増加、農村集落の人口減少及び高齢化、これらに伴う地域社会の機能低下等が懸念される状況にあった。

そこで、尾花沢市では、3つの資源である「雪」、「スイカ」、「花笠」を軸とした田園都市づくりを進めている。

「克雪」、「利雪」、「親雪」による雪との共生

これまでは、豪雪地帯であるがため、雪を克服することのみを考えてきた。しかし、近年は雪を資源と考え、生活に活用する取組みを検討する人が増えた。大量の雪を保存して雪室（天然の冷蔵庫）や冷房に利用するというものである。今後は雪を活用する取組みを広げることで自然環境を守っていくことにつなげ、雪と共に暮らしていける、明るい雪国生活を目指したまちづくりが進められている。

尾花沢型循環式農業の推進

特産のスイカを使用した加工品を開発・販売することにより、スイカの付加価値を高めている。また、近年では黒毛和牛の肥育に力を入れ、肥育頭数が6,000頭と東北一を誇るまでになった。総称「山形牛」ブランドに占める尾花沢牛の割合は6割と高く、毎年チャンピオン牛が生まれ、美味しく見事な霜降りの肉を持つ尾花沢牛を全国に提供している。

しかし、スイカをはじめ畑作には連作障害がつきものであり、対策としていかに地力を上げるかという取組みもしている。その一つとして、尾花沢牛の堆肥を農地に還元していく、尾花沢型循環式農業を推進し「地球にやさしく次世代に誇れる環境のまち」の実現を目指している。

引き継がれる伝統

山形県を代表する民謡の一つ「花笠音頭」は、尾花沢の徳良湖が発祥の地とされている。この徳良湖はかんがい用に造られたため池で、大正8年～10年の築堤の際に唄われた土搗き（どんづき）唄が花笠音頭の元唄になったと言われている。

尾花沢は、この花笠発祥の地であり、市の名前にも花がつくことから、花にこだわったまちづくりにも市民が主体となって取り組んでいる。

また、室町時代には銀山が発見され、ここに銀山温泉が開け、江戸時代には紅花の豪商鈴木清風の活躍、奥の細道行脚で芭蕉の10泊11日逗留など、その昔から歴史あるまちである。

活動の規模

項目	H14	H15	H16	H17	H18
生産量	18,000	15,000	18,500	18,300	18,000
解説	単位：ト、水稲				

項目	H14	H15	H16	H17	H18
生産量	17,700	16,200	15,100	16,800	18,100
解説	単位：トン すいか				
飼養頭数	6,020	6,270	5,910	6,207	6,787
解説	単位：頭 肉用牛				

活用している地域資源

- ・尾花沢夢ファクトリー（もとなり本舗企業組合）
尾花沢の魅力を全国に発信する情報博物館で、特産品の展示販売や観光案内のほか、パネルによる尾花沢の紹介、尾花沢スイカのオリジナルグッズや加工品を開発・販売している。
- ・尾花沢牛
食肉の生産だけでなく、肉用牛の糞尿は、籾殻や規格外スイカの絞りカスなどと混ぜ合せ完熟堆肥として生まれ変わり、農地に還元され役立っている。畜産業は、耕種農家とタイアップし、尾花沢の循環式農業には欠かせないものとなっている。
- ・銀山温泉
銀山川の両側に、木造三・四層の旅館が軒を連ね、風情あふれる家並みが残る温泉街であり、近年は地域一丸となって、景観に配慮した整備が進められている。
- ・徳良湖
2年余りの工事の際、作業唄として唄われた「土搗き唄」が「花笠音頭」となり、唄に合わせてスゲ笠を回して踊ったのが「花笠おどり」の始まりと言われている。

地域活性化のポイント

尾花沢の美しさを創り出しているのは、メリハリのある四季と、ここに住む人々の明るさと地道な活動の賜だと思われる。改めて市内を巡ってみると、10年前の尾花沢とは、変わっていることに気付く。

今の尾花沢は、女性や若者が積極的に活動に参加している。以前と違い、自分たちのまちに何とかして活気を取り戻そう、きれいなまちを未来に残していこうと、地道な取り組みを行っており、市民の意識調査でも、尾花沢に愛着があると答えた20代は76%で、市民のどの層よりも若年層が、尾花沢への愛着心が強いことがわかる。

事業の今後の展開方向

ここ数年間の人口推移は、年平均約200人の減少を示し、中でも29歳以下の層が昭和35年から平成12年までの間に66%も減少している。

近年、雪を活用する取り組みが増えては来たものの、克雪という部分での雪対策は、尾花沢永遠の課題である。冬季間生活を制約し続ける雪は厄介者であることに違いはなく、若年層定住のためにも今後とも雪対策を取り組んでいく必要がある。冬季間の消流雪システムの研究など、行政や企業も支援していかなければならない。

また、循環式農業により特産物を振興しながら、今ある農地を守っていくと同時に、後継者の対策や、持続して営農していけるシステムづくりにも柔軟に取り組んでいく必要がある。金のない時代、「知恵と力を出し合っ」などと簡単に言ってしまうが、何を、誰が、いつ、どんな方法で、を整理し、地域のあるべき姿をみんなで再確認していく。

